

Middlemarch

II . Lydgate の人生における理想の挫折について

嶋 田 貴美子

(序)

批評家の中には、Lydgate の story が「Dorothea (の story) の男性版に過ぎない」⁽¹⁾ものであるという視方がある。確かにLydgateもDorotheaと同様に、高い理想に燃える人生を挫折させたという点では共通している。しかし作者が*Middlemarch*のPreludeの中で、16世紀のスペインにあって修道院の改革者として名高いSaint Theresaを引合いに出し、「後の世に生まれたTheresaたち」は、社会におけるもろもろの障害にあって、「末長く足跡を刻む行為に集中することなく、達成されない善を希求する愛情あふれる胸の鼓動もむせび泣きも、うちふるえながら我を去り、やがては消え去ってしまうのである」と述べたとき、この後世のSaint Theresaの人生の一つとしてDorotheaの人生ばかりでなくLydgateのものもまた考慮されていたかどうか、極めて疑問が残るところである。

上田女子短期大学紀要18号の筆者の論文「Dorotheaの、Mr Casaubonとの結婚における過ちについて」⁽²⁾の序で述べたとおり、*Middlemarch*は、George Eliotがやはり*Middlemarch*と題して青年医師Lydgateを主人公にして書き始めて未完のままになっていた小説と、それからほぼ2年後に新たに書かれた至高の善の追及を理想にかかげた18歳の少女Dorotheaを主人公にした*Miss Brooke*という小説とを合体させたものである。しかしGeorge Eliotはその時、Dorotheaを新しく生まれた*Middlemarch*の小説の主人公にすえながらも*Miss Brooke*という表題をとることはしなかった。それは*Middlemarch*が、副題として付された、*Study of Provincial Life*、すなわちLondonなどの都会から隔絶した地方都市生活者のさまざまな生きざまに焦点を当て人間の本質を探ることを目的として書かれた小説であって、Dorothea一人に偏重させる作品構成上の意図は全くなかったからである。強いていえば主役は*Middlemarch*という、田舎のcommercial societyであるといえよう。しかしその中においても特に*Middlemarch*の一住民Dorothea Brookeの強烈な個性と気高い理想、そして彼女のその理想の崩壊の過程は読者の目をひきつけてやまない。そして彼女は一年半ほどの初老の学者Casaubonとの結婚生活のあと寡婦となつてから、gossipやscandalの圧力に苦しむ人々の、*Middlemarch*におけるただ一人の救世主としてこの小説を統一するのである。そういう意味において、あえてこの小説の主人公をあげるとすれば、Dorotheaということになるのである。

*Middlemarch*という町が上に記したように、もう一つの意味において主役であるということから、*Middlemarch*には、Dorotheaの他にその町に住む実に多くの人々が登場し、小説の中で

作者によりそれぞれの人の持つ悩みや喜びや怒りや悲しみの原因と結果が克明に描かれる。その中で George Eliot がもっとも力を入れて描き出すものは、果てしなき理想に向かう Dorothea の人生の他に、医学上の高遠な理想に燃えて Middlemarch にやってきたばかりの Lydgate の人生である。そして Lydgate の人生と一体化して展開されるのは、うしろ暗い過去をひたすら隠して生きている偽善的な銀行家 Bulstrode の苦悩であり、また Lydgate の妻となる Rosamond が、Middlemarch の市長であり代々工場を経営してきたいわばブルジョアである Vincy 氏の娘であることから Vincy 一家の、特に長男 Fred の人生にかかげられた課題であり、そして Lydgate のよき友人でありまた人生の adviser である Farebrother 牧師とその家族の生活の営みである。Vincy 家及び Bulstrode 氏と接点を持つ、大富豪ではあるが一人暮らしの Featherstone 老人の生きざまもまた *Middlemarch* の興味ある一つのテーマをなしている。さらに Garth 一家の story を加えたこれらの story は、それぞれが特異な、しかし普遍的なひじょうに重たい人生のテーマを背負い、George Eliot がそれを極めて迫真性を持って描き出しているために、それぞれが主人公のような錯角にとらわれる。Dorothea の煉獄の苦しみは、夫 Casaubon の死によってほぼ終息し、Lydgate の、高遠な理想の崩壊の過程のお話にスイッチされる。つまり現在の *Middlemarch* の原案であった Dorothea の story と Lydgate の story は、やはりこの小説の二つの大きな柱になっているが、上にも記したその構成からもわかるように、それらの story に及ぼす Middlemarch という地域共同体の影響という観点からすれば、二つの story は次にのべるようなひじょうに異なったテーマを持っていることがわかるのである。

Dorothea の気高い理想がまさにがたがたと音をたてて崩壊していく過程の story は、Dorothea と夫 Casaubon との間限定された中での story であって、二人ともども、当時はまだ一般の人々が「神々を見るような目で仰ぎ見ていた」地主階級に属していたために、Middlemarch の人々の人生とはそれほど広汎な接点を持ってはいないが、一方 Lydgate は新参の医者という立場から、多かれ少なかれ Middlemarch のほとんどの階級の人々とかかわりを持ち、彼の高遠な理想の崩壊は Middlemarch の中に取り込まれて進行する。したがって、*Middlemarch* の小説が目ざしたもの、すなわち副題の Study of Provincial Life の趣旨からすれば、Dorothea の story と Lydgate の story とでは、Lydgate の storyの方が小説の趣旨にそったものであるという感はどうしてもまぬがれない。実際のところ Middlemarch が commercial society であること⁽³⁾から容易に判断されるように、Lydgate 本人の絶望も、Lydgate の story と同時に進行していく銀行家 Bulstrode の苦渋も、Farebrother 牧師の墮落も、Vincy 氏の悩みも、Featherstone 老人の孤独も、みんな世俗的欲望に端を発している。しかし Dorothea 一人は金銭的欲望の外にあり、小説の中においていわば Middlemarch という地域共同体を超越した精神性に徹した地位を保つ。世俗的欲望はとかく罪を招きやすく、morality に反する行動に走らせやすい。それは gossip や scandal を生み、またそれら gossip や scandal は地域共同体の強力な力となってその共同体の code に反する人々を弾劾する。*Middlemarch* の小説は、Dorothea と Lydgate 二人の理想の崩壊の物語であることの他に、また地域の morality に反する人々の弾劾の物語でもあるといえよう。そういった醜い人間の内なる世俗的欲望がテーマに堕したこの小

説に精神性を与え、一段高いところに引き上げているのが上にも記したように一貫して気高い心の持主である Dorothea である。そして最終的に Dorothea は、共同体としての Middlemarch の圧力をはねのけて、その町の人々からはジプシーとしてさげすまれている Will Ladislaw と結婚し、身分や血筋を最高に重んじる当時の人々に対して新しい時代の息吹をもたらしたのであった。小説の中では早々に終結してしまう Casaubon との関係から生じる自らの悲劇的ドラマとは離れたところにあるこのような Dorothea の役割は、このように膨大で、かつオムニバス形式で書かれた *Middlemarch* の中では関与の限界があり、とかく読者に見落されがちである。そのために George Eliot は *Prelude* の中で主人公としての Dorothea をまず最初に位置付けようとしたのである。それに反して Lydgate は、医師という実利的な立場にある以上、金というものの魔力から完全に解放されていることはできない。Lydgate の理想とするものがいかに純粋なものであろうとも、それは、ありあまる遺産を持ち、上記のように終始金銭から解放されていた Dorothea の理想とは自ずと異なった質のものであったことが推測できよう。この論文では Lydgate の理想がどのようなものであったか、そしてそれはどのようにして崩壊していったかを明らかにし、併せて、Lydgate の人生とは切っても切れない関係にある Bulstrode の罪と罰とを明らかにしたい。

(1)

Lydgate が実際に Middlemarch で行なおうとしたことは、大きく分けて次の三点である。まず第一に内科医外科医という細分化をやめること、つまり自分自身は全科の医師として開業すること。第二に、医薬分業にして患者には処方を書くことにとどめ、薬を調剤したり薬屋から歩合をとったりしないこと。第三に解剖学上のある考えを実証して発見の歴史の一環になること。つまり彼は「Jenner がしたように⁽⁴⁾どんなに時間がかかろうとも医者という仕事の持つ独自の価値によって医者としての名声を勝ちとり⁽⁵⁾」そして「疾病の特殊な問題点、例えば発熱の原因とか熱病そのものに興味を持てば持つほど人体組織についての基礎的知識の必要性を強く感じるようになり」Bichat の後継者たらんことを夢みていたのであった。つまり彼は「自分の理想の追及と医者⁽⁶⁾の職務に対する精神という二つの目標にそった生活を誰も張り合う者がいない人々の中⁽⁷⁾でしようとした⁽⁸⁾」のである。「彼の将来的計画は、Middlemarch にはささやかな良い仕事をし、世界のためには偉大な仕事をすること⁽⁹⁾」であった。具体的には「知的な研究成果と社会福祉の間に最も直接的な関連を提供する」「医者という職業ほど立派なものは他にない⁽¹⁰⁾」という自負の下に当時の非科学的医療を変革し、医薬の金銭的俗性を拒否する純粋な医学を追及しようとしたのである。

当時の Middlemarch の時代思潮について George Eliot は次のように解説している。

古い田舎の社会にもこのような微妙な動きがあった。つまり、ちゃんとした職業を持った頭のよい若いしゃれ者が自堕落な女と結婚して六人の子供を持って一生を終ったという人目を引く没落は言うまでもなく、それほどは目立たなくても社交の境界を常に変え、相互依存の新しい意識を生み出す変動があったのである。少々間違っていささか身分を落とす人もあれば、また高い地位に登る人もいる。…政

治の流れにとりこになる人もあれば、またある人はキリスト教の流れに取りこまれて、その結果とんでもない人々の仲間入りをしているのに気付くかもしれない。こういったあらゆる変動にも動じずに岩のように厳然と立っているいくらかの人々や家々もその堅固さにもかかわらずゆっくりと新しい様相を捉し始め、自己と傍観者という二重の変化に変貌を遂げつつあった。⁽¹¹⁾

つまり Lydgate が Middlemarch にやってきた1829年のその町の人々の思想傾向は、Farebrother牧師の母親が「私はもうじき70歳になりますが経験に基づいて生きています。今ではいたるところでそうなのでしょうが、この地方にも新しい物の見方考え方が入りこんできています。でも私はそういう新しいものにつき従う気がどうしてもしません。だってそれは洗濯することも着ることすらできないまざり物を伴なって入ってくるのですもの」と言っているように、古い伝統の垣根を持った由緒正しいその町にも新しい思考様式が確かに入り込んで、人々はそれを認識しながらもまだまだ古いものをいつくしみ、新しいものを猜疑の目でみる保守的傾向は強いものであった。しかしそういう中でも、時代のそういった変化を受け入れるとまではいかななくても知らないうちにそれに妥協する程度の動きがみられたのである。

古い社会に新しい息吹を吹き込んだ最大の原因は、外部からの人々の流入であろう。Middlemarch においてもまず30年前に Bulstrode 氏が、それからしばらくして Will Ladislaw が、そして Dorothea, Lydgate がこの町に移住してきている。Featherstone 老人もまた純粋に土着の人ではないようである。これらの流入者はそれぞれが Middlemarch の中の部分部分を構成する story の主人公となっているのであって、その観点からみるとこの小説を貫くテーマは、新しい思考様式と土着の人々の持つ古い考え方との確執とみることもできるであろう。Middlemarch において特に保守性が強いのは医療界であった。長い間その町で開業してきた医師たちは、それぞれが自分の得意とする治療法を持ち、それがいかに旧弊な非科学的なものであろうともそれに対して絶対的な自信と誇りを持っていた。「Middlemarch の名医と自認」する Dr Sprague と Dr Minchin はれっきとした学位を持っていることからその町の医師たちの中でも最高の敬意が払われていた。特に老 Dr Sprague は30年前に脳膜炎についての研究論文を発表して以来その業績に医者としての名誉と権威を懸け、それを少しでも汚そうとする者は決して許そうとはしなかった。Wrench 医師は「強壯療法」(strengthening treatment) を標榜し、Middlemarch の旧家の出身の Toller 医師は「低下療法」(lowering system) を標榜し、下層の人々は内科兼有能な産科医である Gambit 医師をかかりつけの医師に任じていた。Lydgate が亡くなった Peacock 医師の後任という形でこの町に移住してきたとはいえ、Peacock 医師の患者がそのまま Lydgate の患者になるということもなく、Chettam 家、Brooke 家、Casaubon 家、Medlicote 家の四軒の大地主を頂点に、厳しく仕分けられているその町の階級意識よりさらに厳しい階級意識と古い因襲とを持った Middlemarch の医療界に、Lydgate は入りこんだのである。土着の因襲や morality は gossip となって強大な impersonal な力を有し、個人を圧迫する。

先にも述べたように Dorothea の story のテーマの主な部分が Dorothea と夫 Casaubon との間にはほぼ限定された観念的な問題にあって、この gossip の力は彼女の story にそれほど力を持ち得なかったのであるが、Lydgate は医者という職業柄直接町の住民と接触する機会が多く、

gossipの圧力を受けやすい立場にあった。そしてLydgateの高遠なる理想を崩壊させたのも究極的には、Middlemarchのこのgossipの力であった。それを暗示するように、LydgateのMiddlemarchの小説へのデビューは、Brooke氏のTipton邸で行なわれたDorotheaのCasaubon氏との婚約披露パーティーの席上でのgossipによってである。Brooke氏が地主であるためそこに集う人々は町の相応の地位と名誉を誇る者達であった。まずFreshitt Hallを有するbaronet, James Chettamの母, Chettam老夫人は、「Lydgateさんは、Northumberlandのとてもいい家柄のLydgate家の御出身なんですってね。そのような方が開業医になるなんてあまりかんばしいことだとは思われませんか。私としては、医業に携わる人は、召使いのような身分の方がいいと思いますわ。そういう人の方がたいていは手腕があるものなのです」と言う。この短いコメントほどLydgateを適格に紹介するものはないであろう。つまりLydgateは高い身分に甘んじて安穩に暮らせる身分を捨て、社会的なステータスの低い医師としての人生を選んだのであったが、そのことはMiddlemarchにおける野心的な医師としての彼の人生に決してプラスにはなりえなかったのである。しかしChettam老夫人はこのようにLydgateについて半ば批判をこめて言ったあと実際にLydgateと話すと、その批判を別の角度から考えてまもなく撤回する。つまり彼女は、「あの方は医者という自分の職業をととてもよくわきまえていらっしゃるようですわ」とBrooke氏に向かって言う。するとBrooke氏は「ああLydgateさんですね。…彼は第一級の医者になれそうに思われます。医者⁰⁴の職業を向上させたいのです。Lydgateさんはたくさん理想があるのです。それは換気や食事療法、まあそういったものについての、とても新しい考えにのっとりたものなのですが」と答える。それに対してStandish氏は即座に「何てことですか。あなたはそれが極めて確かな医療だと思いいになるのですか？従来⁰⁵の医療法をひっくり返そうとしているのですよ。その医療こそ現在の英国人を作ってきたというのに」と異議を唱える。するとBulstrode氏は、「医学的知識は我われの間ではとても低調です。私としましてはLydgateさんの到来を歓迎します。しかるべき根拠が見つかったら新病院の運営をあの方にお任せしたく思います」と口をはさむ。Bulstrode氏は、偽善家と言われながらも莫大な資産にものを言わせて、町の慈善事業に着手し当時は旧病院に併設される新病院の建設に熱を入れていたのである。Standish氏はなおもひるまない。「私は自分の体を実験台に使ってもらうために自らの財布のお金を提供しようなどとは思いません。多少なりとも実験ずみの治療法の方がいい」と言う。するとBrooke氏は、「あなたが飲む薬はどれもみな一つの実験なのです」と返す。つまり「大量の血をぬきとったり発泡剤を使ったりした勇ましい⁰⁶手術がまかり通った時代はまだ過ぎ去ってはいなかった」のだ。

これらの会話から判断すると、Lydgateは、旧式の医療法しかなくしかもそういった従来からの医療法に何の疑問も感じずむしろそれを保持しようとする力がまだまだ根強く存在するMiddlemarchに新しい医療法をもたらし、また自らは高遠な理想を抱いた野心的な革新的な医師として、まずはこの小説の読者に紹介されるのである。そしてLydgateの受け入れ側のMiddlemarchにはLydgateに対して上記の会話からも察せられるとおりStandish氏のように強力な反対意見と、それにChettam老夫人やBrooke氏のような地主階級の人たちの中に見られ

る一応の賛辞と、さらに Bulstrode による絶大な賛辞との三つの態度が混在していることに気付く。さらにここに会する顔ぶれの中には他の医師たちが含まれていなかったために（医師たちは地主階級の催すパーティーには招待される身分ではなかったが、Lydgate は彼のおじの baronet が Brooke 氏と知り合いで、Lydgate は Brooke 氏の後援により Middlemarch に来たのであり、例外としてその Dorothea の婚約披露パーティーに出席していたのであった）彼らの声はこの時点ではまだきこえてはいないけれども、先に記したように当時の Middlemarch の医者たちほど革新はおろか新しい考え方を容認することができない人々は他に類をみないほどで、長年その町で医者としてやってきた実績と誇りに安住している彼らが、すでに町に流布しているこのような評判を持つ Lydgate の仲間入りを快く受け入れるはずはない。Lydgate が出身は上流階級にあらうともできるだけ多くの一般庶民とのかかわりによってしか成り立たない医者という職業にある以上、Middlemarch のほんの少数をなす上流階級の中に見られる賛辞は彼の人生にそれほどの利点をもたらすことはなく、むしろこの町の庶民を代表する Standish 氏の反対意見と他の医者たちの反発が Lydgate の人生の敗北に大きな動力となることの暗示がここにあるのである。そしてもう一つこの場面で見落としてはならないものは Middlemarch の医療水準の低下を嘆き、ある改革の必要性を感じている Bulstrode 氏の Lydgate への絶大な賛辞である。Bulstrode 氏が Middlemarch の市長でもある Vincy 氏すら招かれていない地主の屋敷でのパーティーに加わる榮譽を得たのは、彼の持つ莫大な財力が彼に Middlemarch におけるある種の権力を持たせているからであったが、その財力に対して町の人々のほとんどは不可解な印象を抱き憶測は憶測をよんでさまざまな gossip がささやかれていたのである。彼を悪く言いこそすれ、額面通りに評価する者は妻の Harriet を除いては他に誰もいないことから判断すれば、新病院を Lydgate に任せたいという Bulstrode 氏のその言葉の上に感じられる Lydgate の Middlemarch におけるバラ色の未来も大きく割引かれるのを感じざるを得ない。そのようにして最終的に Lydgate が Bulstrode 氏の money scandal に巻きこまれる用意が、Lydgate の Middlemarch での意欲的な医者としての人生のスタートラインにおいてすでにでき上がっていたのである。Lydgate が特に、人々に浴びるほど薬を飲ませその薬代からの利益で肥える医学を改め営利を目的としない医学、社会福祉を旨とする医学を目ざした理想家であったその立場からすれば、Bulstrode の money scandal に遂に巻き込まれてしまったことは何という運命の皮肉であろうか。Lydgate が Middlemarch に来てまもなく Farebrother 牧師を訪ねた時、医学の純粋性を主張しそのような神聖な職業に携わる者としての医者のあるべき姿勢を述べた Lydgate に対して、Farebrother 牧師は、「あなたの計画の実行は、ピタゴラス的宇宙観⁽¹⁶⁾にのっとった社会を作り出すことよりもむずかしいことです。あなたはあなた御自身の中にもそういうあなたに反逆する Adam の原罪を保持なさっているばかりか、あなたの周りの社会を構成している人々はみんな、その原罪を犯した Adam の子孫たちなのです」。「私たち Middlemarch の人々はあなたが信じているほどおとなしくはありませんよ。私たちには陰謀もありそれぞれ党派にも属しています⁽¹⁷⁾」と言っている。Farebrother 牧師のこの言葉は、Middlemarch の医療の改革をめざす Lydgate への警告と共に先に述べたもろもろの Middlemarch の当時の状況を端的

に述べたものであるといえよう。

2

Lydgateの理想の崩壊の過程は、大きく分けて三つの段階を持って進行する。まず最初のは、新病院の専任有給牧師選任投票時に Bulstrode が強力に推薦する Vicar の Tyke 氏に投票したことであり、二番目は町の工場主である Vincy 氏の娘 Rosamond との婚約であり、三番目は Rosamond との結婚生活の中で起こった生活苦から Bulstrode に千ポンドという大金を借りたことである。すなわち Middlemarch に対して医学的な改革を行ないそれと並行して、目ざす医学的研究の成果を得て Middlemarch の人々にひいては世界の医学界にも貢献しようとした Lydgate の遠大な理想の崩壊は、現実には、その莫大な金の力で、どんなに偽善的であると町の人々の非難を受けようとも、慈善事業の一環として新病院を建設している Bulstrode 氏との接触に端を発していた。Bulstrode 氏はとにかく Middlemarchers に不人気であった。自分がこれと決めた慈善事業には惜しげもなく大金を投じ Middlemarch のためには一役買っていると思われるのに、どうして Bulstrode が不人気であるかという理由は、彼と町の人たちとの次のようななかかわり方にあったのである。

銀行家の話しぶりはとても流暢だけれども言葉数が多い上に、ちょっと言葉に行きづまるたびごとにじっと考えこんではかなりの時間を使ったのである。…声の大きな人々は、彼の低い小さな声を彼の性格そのものとよび、時には公明正大な人の声ではないと遠まわしに言ったりした。しかし聖書が虚心坦懐を声量に置くと明記していないならば、声の大きな人が、何か声とは別の隠しごとをすることが許されるべきではないという理由はなかりう。それに Bulstrode 氏は、うやうやしく身をかがめて人の話にはじっと耳を傾け、目には細心の用心深さをたたえて相手を凝視した。…彼のそうした態度についてある者は彼がパリサイ人 (Pharisee) であるからだと言い、またそれは彼が福音主義者 (Evangelical) であるという人もいた。その中でももう少し彼の深層にあるものに興味のある理論家は、彼の父や祖父はいつたいどんな人であったかを知りたいと思った。というのも25年前の Middlemarch には Bulstrode という人がいたということはだれもきいたことがなかったのである。…この銀行家は明らかに支配者であったが、彼に反対する一派もあり、支持者の中にもその支持は一種の妥協であると感じられるのを認めつつ、公然と物事の成りゆきで、特に商売の行きがかり上悪魔のための明かり持ちにならざるをえなかったのだというようなことを言ったのである。Bulstrode がこうした権力を持っているのは、ただ単に彼が地方の銀行家で、その町のほとんどの商人の財政状態を知り彼らの信用の源泉にふれることができるということばかりではなかった。その権力は気安いところと厳格なところを同時に併せ持った慈善的な行ないによってより強化されたのである。すなわち、容易に恩義を人に与えるが、厳しく結果を監視した。彼は、彼のような地位にある精力的な人の常で、町の慈善事業ではほぼ全般を分担したのに、私的な慈善といえば細々したものばかりで、その数はおびただしかった。…私的な小さな貸し付けは数限りなくあったが、貸す前も貸した後も相手の内情を厳密に調べたのである。…権力は一たんそのような微妙な領域に立ち入ると、それを増長させ、貸し付けの額とは全く不釣り合いなほどにまで拡大していくのである。この権力を、神の栄光を現わすために用いることができるように、できるだけ多くの権力を得る

ことがBulstrodeの主義であった。彼は自分の動機を調整し、神の栄光が要求するものが何であるかを明確にするために、多くの宗教的葛藤と内面的議論を行なった。でも…彼の動機は必ずしも常に正確に評価されるとは限らなかった。人々は…彼がほとんど食べもせず飲みもせず、あれこれくよくよ心配して、自分たちのように生活を楽しむことができないのは、支配という意識の中で吸血鬼のごちそうを楽しんでいるからに違いないという強い疑惑を抱いたのである」⁽²¹⁾

つまり Bulstrode 氏の行なう正義には不正の陰が善行には悪徳の陰が明瞭に感じられたのであった。その Bulstrode が Lydgate の伝染性の熱病の研究によせる情熱を認め、建設中の新病院に熱病患者用の特別病棟を作り、Lydgate の研究に供しようとしたのである。理想に燃えて Middlemarch にやってきたばかりの Lydgate にとって Bulstrode のこの提案はまさに願ってもない幸運であった。Lydgate はその熱病専門病棟の設置が単に自分のためというのではなく Middlemarch のために、そしてまたイギリス全般の医学水準に寄与することになるのであろう有用性を次のような言葉でのべている。

「このような田舎町ではこれほど骨折りがいのあることはありません。…すばらしい熱病病棟が新設されれば、いざ我々が医療改革を行なうときに、それは医学校の基点になるかもしれません。そのような学校を国中に波及させていくことほど医学教育への貢献となるものは他にないでしょう。この地方で生まれ育ち、いくらかでも理想を持ち、同時に公共心も持ち合わせている人であるなら、並以上のものは何もかも London へ London へと殺到して流出して行くのを阻止するために、できることをすべきです。職業上の確かな目的を持つ者であつたら誰でも、田舎でこそ、富を増すことはできないにしても、案外何も拘束を受けずにのびのびと働ける場を見つけられるかもしれません」⁽²²⁾

ここに見られる言葉からもわかるように Lydgate はその新病院新病棟を非常に近代的感覚にのっとった医学改革の発信の場と考え、そのようなすばらしい考えを実行しようとしている Bulstrode 氏の業績を純粹に謳歌しているけれども、そのことによって Bulstrode 氏が Lydgate の上に及ぼす影響力や権力については全く気付いてはいない。しかし前の引用文の中にも述べたように Bulstrode 氏の善行には何かしら蔭がつきまとうのが常であって、この話のあとまもなく Bulstrode 氏は、新病院の専任有給牧師任命問題で Lydgate がその町に来てまもなく親交を結んだ Farebrother 牧師にではなく Lydgate が全く知らない Vicar・Tyke 氏の支持を Lydgate に要請したのである。そして Bulstrode 氏は「自分に反対する者は決して許さない」⁽²³⁾のであった。Bulstrode 氏は、Lydgate が Middlemarch に来るやまっ先に Lydgate のかかりつけの患者になったのであったが、Middlemarch の医療改革を旗印に Bulstrode 氏が始めた新病院新病棟建設を通じて、このようにして彼らの間には医者と患者という関係を越えた一種の連帯が形成されたのである。

新設病院の専任有給牧師任命問題というのは、旧病院が Farebrother 牧師の教区にあったことから、患者の宗教的救済の任務はこれまで Farebrother 牧師が無給で行なってきたものを、その旧病院のわきに建設された新病院の完成を機会にその任務を行なう牧師の改選を行ない、勤務規定を定めてこれを有給にするというものである。これは一つには Bulstrode 氏が Farebrother 牧師を嫌悪し、この機会に Farebrother 牧師の地位を奪おうという意図から発せら

れた案であった。Farebrother 牧師も Bulstrode 氏への嫌悪感を次のような言葉で表現している。

「私はあの人の属している集団が好きではないのです。あの人たちは視野が狭く、隣人たちを幸せにすることよりも不愉快な気持ちにさせることの方が多いのです。あの人たちがやろうとなさっていることは、世俗的な徒党主義の精神の実現です。あの人たちは他の人間のことを自分たちを天国に送るための肥やしになるべき屍であると思っています」²⁴

そのような Bulstrode への強い嫌悪感がありながらも、Bulstrode 氏との関係を Lydgate により重視させ、有給牧師任命の選挙には Bulstrode 氏が強く推す Tyke 氏に投票するように勧めた上に、それでも自分たちの友情は全く変ることがないと言い切る Farebrother 牧師の寛大な人柄に接して Lydgate の心はすっかり落ち着きを失っていくのである。Farebrother 牧師は40歳近い年齢ではあったが結婚をしていないかわりに老母と二人のおばを抱えていた。そして自分はまだ Vicar であり、Cadwallader 牧師などとは異なって聖職禄のない一教区の牧師であって、家計は常に逼迫し聖職者としてはあるまじきビリヤードやホイストなどの賭博に手を染めることもあったのである。Farebrother 氏の人情味あふれる説教には定評があったものの、反道徳的なことには過大に取りざたする Middlemarch の人々は、しばしばギャンブルを行なう Farebrother 牧師の人格を疑う人々も少なくなかった。しかしもしも新病院の有給の専任牧師になれたとすれば40ポンドという給料は彼のその癖を矯正するであろうと Lydgate は考える。一方の Tyke 牧師は、きまじめではあるがとても視野が狭く、町の人々から Methodist であるとも噂されていた。²⁵

病院建設が主として Bulstrode 氏からの出資金でまかなわれていたとしても病院は公共施設であるために、病院の専任有給牧師を従来通りの Farebrother 牧師にするかまた新たに Tyke 氏を任ずるかの決定は、病院運営の理事と医師たちの合同会議の選挙に委ねられることになったのである。医師の一人としてそのどちらかに投票せざるを得ない立場の Lydgate は、次のような心境を吐露している。

Lydgate がどちらの側に気持を向けるとしても彼をたじろがせる要因があった。… Bulstrode と仲たがいで自分自身の最高の目的を反故にしたくなかった。…さらに Tyke に投票すれば明らかに自分に都合のいい方に投票するということになり、そう考えること自体もいやだった。…他の人々は彼が自分を偉大なものにし、そして出世するために Bulstrode にとり入ろうとしていると言いたてるであろう。自分が立身出世のことだけを考えるのであれば、銀行家と友好状態にあらうが敵対関係にあらうがそれは少しもかまわなかったであろう。彼が実際に関心を持っているのは、彼の仕事の手段であり、理想を実現させるべき媒介物であった。結局よい病院を手に入れることの方をより優先させるべきではなかろうか。その病院でこそ熱病の特異性を論証し、治療上の結果を分析することもできるのだから。… Lydgate は初めて糸のようにからみついたささいな社会的条件の圧力とその複雑さによって、出鼻をくじかれた思いがしたのであった。²⁶

票決とはいえ誰がどちらの候補者に投票するかということは明白であった。両者五分で、一足遅れて会場に着いた Lydgate の一票が決定権を持つ重たい票になってしまったのである。

Bulstrode 氏との癒着を揶揄する周囲の人々の中で Lydgate は堂々と Tyke と書いて、期せずして Bulstrode 氏との関係を公然と社会にアピールしたのである。それはすなわち Middlemarch の他の医師たちに「Lydgate も Bulstrode と同じ穴のむじなである」という印象を与えるものであった。Middlemarch を代表する二人の医者、Dr Sprague と Dr Minchin が共に Bulstrode に対して抱いていた反感は次のようなものから成り立っていた。

彼らは改革者なるものやたらと干渉したがる門外漢には結束してそれに抗する用意ができていた。

このために彼らは同じように Bulstrode を嫌っていたのだ。……一介の素人が医業に携わる者の仕事を詮索したり、常に出しゃばって自分の改革案を無理強いすることは、彼らのような職業人にはとうてい鼻もちならないことであつた。⁽²⁷⁾

Bulstrode 氏が Dr Minchin や Dr Sprague が言うように、non-professional であり layman であるのにもかかわらず、他の人にはよく理解できない宗教的思想と金の力で地域の医学上の改革のために大規模な病院を建設することは、例え Lydgate の介入がなかったとしても、長年 Middlemarch の「医者の名声という不可解な特権を甘受していた」これら両医師にとっては不快きまわりないものであつたのである。その Bulstrode 氏への反感は Lydgate の「外国の医学的見解をやたらとひけらかしたり、先人の医者たちによって解決済みの、もはや忘れ去られている見解についてその権威をぐらつかせががる傾向」と合わせてより大きいものとなり Lydgate に向けられたのである。Wrench 医師や Toller 医師は「Lydgate という男は Bulstrode の意図に仕えるために生まれてきたこしゃくな奴だ」とうわさするのである。⁽²⁸⁾

しかしこの病院付専任有給牧師の選挙の一件以来、Bulstrode 氏の Lydgate への信任はますます厚くなり Bulstrode 氏はまず旧病院の医長に Lydgate を任命する。そして「こうなるとあなたは改革者としての自分自身の立場を周りに示すことにはなりますが、そのことによって同業者仲間からかなりの嫉妬とか嫌悪感を持たれることになるでしょう。そういう事態からあなたがしりごみしなければいいのですが」と言う。すると Lydgate は次のように答えるのである。⁽²⁹⁾

「僕は勇敢な者だなどは、はっきり申し上げることはできません。でも戦うことはとてもおもしろいことだと思っています。他のどの分野でもそうでしょうが医学という分野では、よりよい治療法が発見され、それを実地に移すことができるという信念を僕自身が持っているからこそぼくはこの仕事にとても魅力を感じるのです」⁽³⁰⁾

つまり Lydgate は、

ただ平凡に過ごすことができずに、何か偉業を成し遂げたいと思い、納得できないことは断固として回避し、Mammon なんかにか養ってもらったり背中に背負ったりなんてことは絶対にしないぞと思い、もし Mammon と関係を持つとするなら、彼に自分たちが乗った戦車をひかせよう
と
と思いがちな27歳の若者であつたのだ。⁽³¹⁾

Wrench 医師の反感をまともに受ける事件が起こったのはそれからまもなくのことであつた。Middlemarch の市長兼工場主である Vincy 家の長男 Fred が腸チフスにかかったのを、家の

かかりつけの医者である Wrench 医師が誤診し、Lydgate がそれをみぬいて Fred の急場を救ったのである。Wrench 医師はその工場主夫妻の逆鱗にふれてとうとうかかりつけの医者という立場を Lydgate に譲ったのであった。Fred をたびたび往診にくる Lydgate を、Fred の妹で 22 才の Rosamond は特別な目で見始めるのである。というのも Rosamond にとって Lydgate は、彼がその町に到来して以来ずっと注目していた人であったからだ。

Rosamond は Middlemarch の町内きっての美人である。Dorothea も見る人によっては非のうちどころがない美しい女性と絶賛されはしたが、Dorothea の学問的情熱とピュリタニズムは世俗的で社交に明け暮れるこの工場主夫婦の下で大切に育てられた Rosamond の持つ美とは異質の美しさを Dorothea に与えていたのである。そして Middlemarch の人々は二人の美しさに対して上流階級に属するおじの Brooke 氏のところに身を寄せるようになってまだ一年に満たない Dorothea の個性的な美しさよりも、代々 Middlemarch の工場主であった Vincy 家の娘 Rosamond の気楽な美しさに軍配をあげる人々が多かった。「ある大きな花が花びらを開きまさにそこからたった今現われ出たかのような」、また「小さい時にとらえられ Lemon 校で教育された³⁴ 空気³⁴の精」のように美しい女性であったから、Rosamond 本人さえその気になりさえすれば結婚相手には事欠くことはなかったであろう。しかし Rosamond は、「いつも見慣れてきた Middlemarch の若者たちの顔や姿一つまり彼らの少年の頃から知っている様々な均整のとれない横顔や歩き方や、それに彼ら独得の言い回しなどにあきあきしていた³⁵」のである。つまり Rosamond が頭の中で考えていた結婚相手は「自分の見知らぬ土地の人であるということが絶対必要な条件であった³⁶」。すなわち「Middlemarch 生まれの人であってはならなかった³⁶」のである。「そしてその人は、彼女自身の姻戚関係のようなものが全くない人であった。最近では何とその人は準男爵の地位に何らかの血縁のある人でなければならぬという強い要求がこの構想に入りこんできたようであった³⁷」。彼女は母親である Viney 夫人の実家が旅館であることをとても恥ずかしく思い、また「まもなく死にそうな夫と暮らしている Lowick 邸の女主人である³⁷」Dorothea の立場すらそんなに悪いものではないと思うほどの階級意識が強い女性で、Adam Bede の Hetty Sorrel の心にも似た、美貌によって少しでも上流にのし上がりたいというような俗物根性の持ち主だったのである。Rosamond の頭にあったのは周囲の者が羨む暮らしであった。

その Rosamond が当時の一般的通念としてはあまり高くない社会的地位にあった医者 Lydgate との結婚を望んだのは、Lydgate がこの地以外のよそ者 (Stranger) であるということと、彼が high connectin を持った Lydgate 家の出身であって、あわよくば自分もその上流階級の仲間入りができるかもしれないという期待を抱いたからであった。つまり Rosamond の心をしっかりとらえていたのは、「Turtius Lydgate 本人そのものではなく Lydgate が彼女にもたらず関係だったのである³⁸」。Lydgate が身のこなし、風貌、言葉使い等々において申し分のないものであったとしても、³⁹ 彼が現在は貧しい医者で、世俗の欲望とは無縁の遠大な理想を抱いていることなど Rosamond の目には入っては来なかった。「彼女が予想した (Lydgate との) 前途には経済上のものは何もなかった。ましてやむさくるしいものなど入りこむ余地すらなかった⁴⁰」。

彼女は上品なものの優雅なものを好んだが、それに支払われるべきお金のことは全く気にかげなかった」。つまり、「お金が絶対必要なものであるということはわかっていたが、でもそれは常に⁽⁴¹⁾だれかが用意しておいてくれるものだという固定観念があったのである」。要するにRosamondのLydgateへの愛は、Lydgateが、Vincy家の娘としてMiddlemarchに暮らすマンネリズムからの救世主になりうるかもしれないという可能性と、またLydgateを階級上昇志向の夢の実現のための道具と考えるその俗物精神との二つを柱にして成り立っていたのであった。従って、Lydgateがその二つのことを彼女のために満足させてやれないとしたら、彼女のLydgateへの愛は消滅し、愛なき結婚の絆だけが殺伐として二人の間に横たわることになることは自明のことである。しかしLydgateはそのようなRosamondの愛の中味については全く認識してはいない。

LydgateはLydgateで先に述べたような高遠な理想と断固たる改革精神を持っていたにもかかわらずそうした生き方と一見矛盾するようにみえる俗物根性があったのである。

彼の知的な情熱の所産である知性の特徴は、女性や家具についての感覚や判断、それとまた、自分が他の田舎医者よりも良家の生まれであることを（自分からは言わなくても）周囲に知ってもらいたいという願望にまでは浸透していなかった。生物学も改革の実行計画も、…家具のことを考えると、その家具は第一級のものでなくては気に入らないという俗物根性を彼に捨てさせることはできなかったのである。⁽⁴²⁾

つまりLydgateもRosamondも生活者としては本質的に同じ欠陥を持っていたのであった。「新しい衣服をたくさん持っているのはLydgateにとってしごく当然のことであつたし、衣服などというものは何着もまとめて注文するのが普通だと思っていた」が、その時まず先にお金の有無が念頭に上がることがなかったのは結局Rosamondの金銭感覚と同じであり、また「Rosamondが子供の頃から浪費癖のある家族に親しんできたためにすばらしい家政とは、何もかもただただ第一級のを注文することであつてその他の物では全然『まに合わない』と思った」のも、「『どうせやるからには本格的にやらねばならない』そして「他の生き方など考えられ」ず、ましてや儉約などというものは「一文惜しみのさもしい考え方」であるとするLydgateの考え方と相通じている。⁽⁴³⁾

LydgateはParisに遊学中、俳優で同じ劇団の俳優の人妻Laureとの悲恋の経験があり、それは今もなおLydgateの心になまなましく陰惨な影を落していた。⁽⁴⁴⁾RosamondがLydgateとの初対面で、自分の夫となる人はこのような人でなくてはならないと思ったのとは異なって、LydgateはRosamondの美貌と知性と、音楽や絵画に卓越した才能とを賞賛し、「もし自分が結婚するようなことになったら、妻となる人はきっと、このような女性本来の輝きを持ち、花と音楽に通じる特徴ある女らしさを備えそれ自身高貴であつて、清純で優雅な喜びのために形作られた、あのような美しさを持った女性であろう」ということは感じつつも、以前Madam Laureに抱いた狂気のような恋情が「二度と他の女性に対して起ることは考えられなかった」のであつた。⁽⁴⁵⁾またLydgateは自分の医学的野心のために「今後5年間は結婚するつもりはなかった」。⁽⁴⁶⁾Middlemarchの人々の中に広まりつつあつたRosamondとの婚約の噂に反発し疎遠にしてい

た Rosamond との再会の折、Lydgate は Rosamond の自分への愛の深さを初めて知ったのである。先に述べた Madam Laure との恋からもわかるように Lydgate は「弱い人や苦しんでいる人に対してやさしくする」騎士道的精神が旺盛であり、Rosamond の愛を即座に受け入れてしまったのであった。その時の Rosamond の涙が本物ではなかったとは言い切れないが別の場面で作者は Rosamond について次のように言っている。

Rosamond の神経という神経、筋肉という筋肉が自分が見つめられているという意識に調和されていた。彼女は彼女の体を作り上げているいろいろな部分で演技のできる生まれながらの俳優であった。彼女は自分自身の性格までも演じてそれがとてもすばらしかったのでそれが明確に自分自身の性格であるということが自分でもわからなかった。

このような女性の本質を見きわめるのは誰にとっても極めて困難なことであったであろう。ことに病気の原因を解剖することによって探り、顕微鏡などを使って目で確かめることによって科学的真実を追い求めるというような実証を重んじる Lydgate が、Rosamond の涙が Rosamond 本人にとっては Lydgate への切なる愛の証であったとしても、それが全く Rosamond のひとりよがりの愛であって、Lydgate の人生への野心や高遠な理想を具体的に認識した上での彼の存在そのものへの愛の証ではなかったことに全く気がついてはいない。しかしこの時の自分への愛に悩み苦しむ Rosamond の姿に、それまで結婚など毛頭考えてもいなかった Lydgate は、30分もしないうちに Rosamond の婚約者となってしまったのである。そして彼らは結婚へと向かうのであるが、彼らの不幸な結婚は、いわば Lydgate の騎士道精神によって決定されたその婚約の時点で、すでにもう始まっていたのであって、Lydgate は一生 Rosamond の俗性にかしづき、改革の野心も科学的発見の夢もそれに埋没させざるをえなかったのである。

注

- (1) 「ジョージ・エリオットの小説」—分析と再評価— 藤田清次著 昭和52年7月25日、P242
- (2) 1995年3月発刊
- (3) *George Eliot and the Politics of National Inheritance* by Bernard Semmel, Oxford University Press, 1994, P93
- (4) Jenner : Edward Jenner : 1749—1823, イギリスの医師 牛痘にかかった者は天然痘にかからないことに着目し、種痘法を発明、予防接種の創始者となる。
- (5) *Middlemarch*, chapter 15
- (6) 同上
- (7) Bichat : Marie Francois Xavier Bichat : 1771—1802 フランスの解剖学者。組織学と一般病理学を確立した。
- (8) MDM, Chapter 15
- (9) Ibid "

- (10) Ibid "
- (11) Ibid Chapter 11
- (12) Ibid Chapter 17
- (13) Ibid Chapter 15
- (14) Ibid Chapter 10
- (15) Ibid "
- (16) Pythagoras：前560～前480年頃。ギリシャの哲学者，数学者。宇宙の根源は数であるとし，数学，天文学の発展に寄与した。
- (17) MDM Chapter 17
- (18) vicar：教区牧師，英国国教会では教区の十分の一税を受ける団体または個人から俸給を受ける者。または rector（教区長）の代理。
- (19) 当時の一ポンドがどれぐらいの価値を持っていたかということについては，労働者の年賃銀が50ポンドであるという事実からおおよそ見当がつくであろう。1千ポンドといえは，労働者の年平均賃銀の20倍であり，大金であったことは言うまでもない。
- (20) パリサイ人：Pharisee：紀元前2世紀に起こったユダヤ教の一派。法律の遵守を唱え宗教的な清めを強調，民衆の間に大きな勢力を持った。福音書では，イエスの論敵として描かれ，自己義認の傾向が激しく批判された。転じて偽善者，形式主義者
- (21) MDM, Chapter 13
- (22) Ibid, "
- (23) Ibid, Chapter 18
- (24) Ibid, "
- (25) Methodist：プロテスタント教会の教派の一つ。1730年代にイギリスのJohn Wesleyが起こした英国国教会の改革運動に始まり監督制度と代議制度を統合する。
- (26) MDM, Chapter 18
- (27) Ibid, "
- (28) Ibid, "
- (29) Ibid, Chap. 16
- (30) Ibid, Chap. 18
- (31) Ibid, Chap. 13
- (32) Mammon：マタイ福音書六章〔汝ら，神と富（マンモン）とに兼ね事ふることを能わず〕から富の神（財貨，物欲の擬人的偶像）
- (33) MDM, Chap. 13
- (34) Ibid, Chap. 16
- (35) Ibid, Chap. 11
- (36) Ibid, Chap. 12
- (37) Ibid, Chap. 31

- (38) *Adam Bede* : George Eliot の, *Scenes of Clerical Life* につく第2作目の小説
- (39) *Adam Bede* に登場する美しい農民の娘でことのほか虚栄心が強い
- (40) MDM, Chap. 16
- (41) Ibid, Chap. 27
- (42) Ibid, Chap. 15
- (43) Ibid, Chap. 15
- (44) 劇中の事故に見せかけて, 実際は夫を殺害し, 罪をのがれたMadam Laureをたずね当てたLydgateは, Laureが「ほんとうは夫があきあきして殺害したのだ」という告白をきき, 彼の苦しみ悩むLaureへの騎士道精神は完全に裏切られたのである。MDM, Chap. 15
- (45) MDM, Chap. 31
- (46) Ibid, Chap. 12

参考文献

- (1) 「世紀末までの大英帝国」 長島伸一著 法政大学出版局 1987年4月
- (2) 大辞林 三省堂 1990年3月
- (3) Kenkyusha's New English—Japanese Dictionary
- (4) *Adam Bede* by George Eliot Collins London and Glasgow 1963
- (5) *The Real Life of Mary Ann Evans* by Rosemarie Bodenheimer, Cornell University Press 1994